小学校特別支援教育部会

部会長　　校　長　堺　　裕明
実践者　　講　師　神馬　誠吾

1　研究主題

特別支援学級における障がいの状態等に応じたきめ細かな指導・支援の在り方の研究
～Ａ児の「自立活動」におけるＳＥＬ－８Ｓとビジョントレーニングの取組を通して～

2　主題設定の理由

（１）社会の要請から

障害のある幼児児童生徒をめぐる動向として、障がいの重度・重複化や多様化、学習障害（LD)、注意欠陥多動性障害（ADHD）等の幼児児童生徒への対応や早期からの教育的対応に関する要望の高まり、卒業後の進路の多様化、ノーマライゼーション理念の浸透などが見られる。こうした時代の進展の中で、特別支援教育において、医療・福祉・労働等の関係機関と連携した支援の必要性・重要性が掲げられる。

このような状況の変化に適切に対応し、障がいのある幼児児童生徒が自己のもつ能力や可能性を最大限に伸ばし、自立し社会参加するために必要な力を培うためには、一人一人の障がいの状態等に応じたきめ細かな指導を一層充実することが重要である。

（２）新学習指導要領から

来年度から、完全実施となる新学習指導要領総則の第４には、「特別な配慮を必要とする児童への指導」の記述が現行の指導要領よりも、さらに具体的なものとなっている。まず、障がいのある児童への指導については、個々の児童の障がいの状態等に応じた指導内容や指導方法の工夫を、「組織的かつ計画的に」行うものと規定。そのうえで、特別支援学級で実施する特別の教育課程については、障がいによる学習上または生活上の困難を克服し自立を図るために自立活動を取り入れること、児童の障がいの程度や学級の実態等を考慮したうえで、実態に応じた教育課程を編成することなどが明記された。

現在、田川郡の各小学校でも特別支援学級が複数設置されている。児童の多様性を認め、尊重していくことが求められるこれからの社会において、特別支援教育が果たす役割は大きい。新学習指導要領の理念を実現するためにも、「自立活動」「日常の生活における指導」「生活単元学習」等において、児童の障がいの状態等に応じたきめ細かな指導・支援の在り方を研究することは意義深い。

3　主題の意味

（１）障がいの状態等に応じたきめ細かな指導・支援とは

特別支援学級においては、障がいの状態として「知的障がい」「肢体不自由」「病弱・身体虚弱」「弱視」「難聴」「自閉症・情緒障がい」が示されている。「障がいの状態等に応じたきめ細かな指導・支援」とは、障がいのある児童が、一人一人の能力や可能性を最大限に伸ばし、自立し、社会参加するための基盤となる生きる力を培うため、一人一人の教育的ニーズに応じて、適切な指導及び必要な支援を行うことである。

（２） Ａ児の「自立活動」におけるＳＥＬ－８Ｓとビジョントレーニングの取組とは

「自立活動」とは、個々の児童が自立を目指し、障害による学習上又は生活上の困難を主体的に改善・克服するために必要な知識、技能、態度及び習慣を養い、心身の調和的発達の基盤を培うことを目標とし、６区分で示されている。具体的には、「健康の保持」「心理的な安定」「人間関係の形成」「環境の把握」「身体の動き」「コミュニケーション」で構成されている。

本研究で焦点をあてるＡ児は、２年生男児である。明るい性格で人なつこく、学級の友達ともよく遊んでいる。１年生の頃と比べると学力も上がり、見通しを持たせることで勉強に集中して向き合う時間も増えた。

しかし、学級の中では身の回りの整理ができずに机やロッカーの周りには、いつもＡ児の鉛筆や帽子などが散らかっていたり、友達や教師の顔を見て挨拶ができなかったりする。そこで、自立活動「人間関係の形成」「コミュニケーション」において、社会的能力の育成を図るために、SEL－８学習プログラム（Social and Emotional Learning of 8 Abilities）に取り組む。

また、視野がせまく、すぐにつまずいて転んでしまう事や、文字の形が整わずに、読めない字を書いてしまう事もある。これは、Ａ児が「距離感がとらえられない」「形を覚えるのが苦手」といった「見えにくさ」を感じているのではないかと考える。そこで、自立活動「身体の動き」において「見えにくさ」に焦点を当て、目から情報を取り込むための目の機能、理解する機能等の育成を図るために、ビジョントレーニングに取り組む。

４　研究の目標

Ａ児の「自立活動」におけるＳＥＬ－８Ｓとビジョントレーニングの取組を通して、特別支援学級における障がいの状態等に応じたきめ細かな指導・支援の在り方を究明する。

５　研究の仮説

特別支援学級在籍２年生男児に焦点をあて、「自立活動」において、ＳＥＬ－８Ｓとビジョントレーニングの２つの手立てを講じれば、特別支援学級における障がいの状態等に応じたきめ細かな指導・支援の在り方を究明することができるであろう。

６　指導の実態

（１）Ａ児の実態の把握

①社会的能力の課題

Ａ児は実態でも述べた通り、明るい性格であり、人見知りこそすることはないが、自分の欲求を優先してしまう傾向にある。例えば友達と遊びこそするが、自分の欲求を優先してしまうため、ブランコの順番を守ることができなかったり、ドッチボールにおいても、ボールを投げたい一心で、友達が持っているボールを取り上げてしまったりする。また、人との距離感が近いために、友達や教師に対してすぐにベタベタくっついていくなど、相手がどんな人で、どんな気持ちかを想像することに課題がある。

このような課題から、社会的能力がまだ年相応でなく、未熟であると考えられる。

②学習上の見えにくさの課題

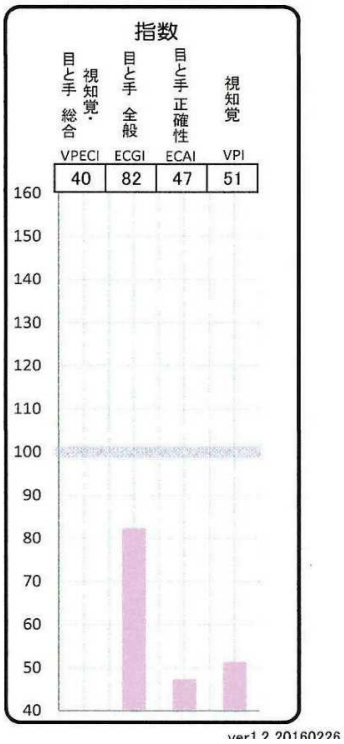
文字の形が整わず、Ａ児が書いた字を読むことが困難である。また、名前や問題の答えを書くときに、枠から大きくはみ出してしまう。板書を写すときも一文字一文字確認しながら書くため、長く時間がかかり、音読をするときにも、同じ行を何度も読んでしまったり、読み飛ばしをしたりする。この背景として、情報の入力から出力という流れで考えてみると、「目（視覚）からの情報を受け取って、動作によって応答する」という流れのいずれかでつまずきが生じ、見えにくさを感じていることが考えられる。

③生活上の見えにくさの課題

学校生活でも視野が狭く、ものや人とよくぶつかったり、すぐこけてしまったりすることがある。集中して何かを見るということも苦手で、話を聞くときなどに絶えず視線を動かしている。また、おはしやはさみをうまく使えないことも、学習上の見えにくさと同様に、情報の入力から出力という流れにつまずきが生じているのではないかと考える。

③ＷＡＶＥＳ検査の結果から

Ａ児の「見る力」の実態を測るために、「見る力」を幅広くアセスメントできる「ＷＡＶＥＳ」検査キットを使い、検査を行った。形や位置関係、方向などを見分ける力を総合的に判断するための指数である「視知覚指数」。目と手の協応の速度と正確性を総合的に判断する指数である「目と手の協応全般指数」。目と手の協応の正確性を判断するための指数である「目と手の協応正確性指数」。そして、視知覚と目と手の協応の能力を総合的に判断するための指数である「視知覚＋目と手の協応指数」の４つの指数の数値が分かる。その数値が１００の場合、同じ年代の子どもたちの中で平均的な成績である。Ａ児の検査結果を見ると、「視知覚指数」は４０、「目と手の協応全般指数」は８２、「目と手の協応正確性指数」は４７、「視知覚＋目と手の協応指数」は５１と、すべての項目で１００を下回る結果となった。この結果を見ても、やはりＡ児には視覚機能に課題があると考えられる。



（２）課題から見えてきた重点課題

実態からＡ児の社会的能力と視覚機能には課題があり、このままでは学習面でも生活面でも多くの労力を必要とし、それが後に「苦手」につながり、最終的には「やらなくなる」という悪循環に陥ってしまう場合が想定される。そのため、ソーシャルスキルトレーニングを実施し、社会的能力の育成を目指し、視覚機能の課題を少しでも改善できるように、本研究では「SEL－８学習プログラム」・「ビジョントレーニング」を用いて、Ａ児の社会的能力の向上と視覚機能の改善に取り組んだ。

（３）具体的な取り組み

①「SEL-８学習プログラムの使用

「SEL」とは、欧米諸国で広く実践され重要性が認識されている数多くの心理教育プログラムの総称であり、「SEL-8 学習プログラム」は、SEL で共通して注目されている社会的能力を日本の教育事情に合わせて効果的に育成できるように工夫した学習プログラムのことである。「SEL-8 学習プログラム」を使用することによって、①自己への気づき，②他者への気づき，③自己のコントロール，④対人関係，⑤責任ある意思決定，⑥生活上の問題防止のスキル，⑦人生の重要事態にする能力，⑧積極的・貢献的な奉仕活動，という８つの能力を育むことができ、子どもの社会的能力を総合的に育てることができる。実際の学習では、ペープサートや紙芝居，ゲームや身体活動，ロールプレイ，語呂合わせなどをもちいて学べるプログラムとなっているため、子どもも楽しく、かつ具体的に社会的能力を育成できる。

本実践では、Ａ児が相手の表情を見て、適切な距離感を取ることができるように、「あいさつ」の学習を行った。この学習を行うことで、相手の表情を見て、相手がどんな人かを理解した上で挨拶をするため､適切な距離感を把握することができる上に、基本的な生活習慣を身につけると考えた。

ア　『あいさつロールプレイング』

ロールプレイングを取り入れた、挨拶のソーシャルスキルトレーニングを行った。「相手の目を見て挨拶をする」「相手の目を見ずに挨拶をする」「無視する」の３パターンを行い、一番嬉しかった挨拶、一番嫌だった挨拶を考えさせた。Ａ児自身、ロールプレイングを行う中で、「相手の目を見て挨拶をする」パターンが嬉しかったと発言し、「無視する」パターンをとても悲しかったと答えた。その後、職員室に行き、校長先生や教頭先生に対して「相手の目を見て挨拶」を実行した。校長先生や教頭先生から「挨拶が上手だね」と言われ、Ａ児自身も「挨拶したら、褒められたね」と喜んでいた。

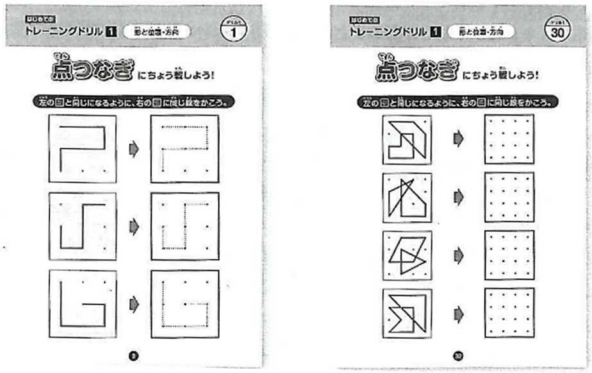
イ　『自分のもちもの自分でかくにん！』

机やロッカーの周りが散らかっていたり、鉛筆や帽子がよく床に落ちたりしている実態から、自分の持ち物の管理や整理整頓の力を養うソーシャルスキルトレーニングを行った。学級に在籍している４年生とＡ児の机周りと引き出しの中を見比べ、感想を聞くと『ぼくの机と引き出しはぐちゃぐちゃ･･･』という発言があった。この発言を課題にし、整理整頓の大切さを理解させると同時に、上手な整理整頓の方法を学んでいった。学習後、帰りの会で【整理整頓チャレンジ】と名乗り、整理整頓ができているか確認をする時間も作った。

②「はじめてのトレーニングドリル」の使用

視覚関連基礎スキルの向上を目的としたプリント教材である「はじめてのトレーニン

グドリル」を、１日１５分程度で朝学習の時間や自立活動の時に行った。このドリルを活用することで視覚関連基礎スキルに少し弱さがある子どもの「見る力」の成長を促すことをねらった。ドリル１からドリル３があり、それぞれ構成が違っているため、毎日ドリル１から３までバランス良く組み合わせ、トレーニングを行った。ドリルを始めた当初はうまく進まず、ドリルを途中で放棄することもあったが、日を追うごとに点つなぎ等も線がずれることなく書くことができるようになった。さらに、１５分以内にドリルが終わる場合もあり、自信を持ってドリルに取り組むようになった。



【トレーニングドリル：点つなぎ】

【トレーニングドリルをする様子】

③「眼球運動」

「入力」「情報処理」「出力」で重要な役割を担う機能がそれぞれあり、「入力」に関わる機能である「眼球運動」のトレーニングを行った。

手に持ったペンを目標とし、眼をスムーズに動かす練習をする「キョロキョロ運動」。遊び感覚で行うため、A児もまったく抵抗なく取り組むことができた。

線を端から端まで眼でたどっていき、線の形に合わせて、眼をなめらかに動かす練習をする「線なぞり」。ストップウォッチで始点から終点にたどり着くまでの時間を計ったり、「競争しよう！」と声をかけ、一緒に行うことで、A児も楽しみながら取り組むことができた。

④「視空間認知」

「情報処理」に必要な機能である「視空間認知」のトレーニングを行った。「視空間認知」は、眼から入った情報を処理して、見たものの全体像を把握する働きがある。

見本と同じように点をつないで図形を描く「点つなぎ」。最初は点と点を結ぶことも難しく、一問一問に時間がかかっていたが、『どこから始まっているか』『横に何個動いているか』等の助言をしていくと、自分から『ここからが始まりで、横に何個行って～』と言いながら取り組むようになった。その結果、時間をかけずに解くことができるようになった。

見本を見ながら、同じポーズをまねしていく「まねっこゲーム」。A児が好きな音楽をかけ、リズムに乗せて見本と同じポーズをとらせた。リズムゲームの感覚で一緒に楽しんでいるため、A児からも『はやくやりたい！』といつも言っていた。学習が早く終わったり、時間が余ったりしたときなどに行った。

⑤「眼と体のチームワーク」

最後に「出力」に関する能力である「眼と体のチームワーク」のトレーニングを行った。「眼と体のチームワーク」は、眼で見て、脳で認識された情報を基に体を動かすために必要な機能である。

綱渡りの綱に見立てた線の上を、はみださないように歩く「バランス綱渡り」。『踏まなかったらワニに食べられる』と自分で想像しながら、眼で見たところへ足を運ぶ動きを繰り返す事で、眼と体の連携を高めることができた。

転がってくるボールを落とさずにキャッチする「ころころキャッチ」。ボールの動きを目で追って取ることで、眼の動きや眼と手の連動をよくしていく。段階に応じて難易度を上げ、コップやお玉を使ってキャッチし、飽きさせない工夫を行った。

バスケットボールでドリブルしながら体育館を一周する「ドリブルでゴー！」。元々A児がバスケットボールをするのが好きなため、A児が意欲的にできると考えた。ドリブルをしながら移動することで、眼と体を連動させて動かすことができ、眼と体の連携を向上させることにつながった。一緒にドリブル競争をしてみたり、ゴール前に到着したらシュートをしたり、遊びの要素も取り入れていた。帰りの会の振り返りでは、毎回『ドリブルでゴーができて良かったです』という発言がいつも聞かれた。

8　成果と今後の課題

（1）成果

○　「SEL-8 学習プログラム」のあいさつロールプレイングを行ってから、A児の挨拶の意欲が明らかに向上した。廊下で教師とすれ違う度に目を見てあいさつをすることができ、友達に対しても、目を見て挨拶ができるようになった。さらに、目を見て挨拶をすることで、称賛されることが多くなり、自己肯定感も向上し、自分から挨拶を行うようになった。また、目を見て挨拶ができるようになってから、教師に対しても友達に対しても、ベタベタひっつくことがなくなった。

○　「SEL-8 学習プログラム」の『自分のもちもの自分でかくにん！』を行うことで、鉛筆を落としたら教師に注意されるまで拾わなかったA児が、すぐに鉛筆を拾うようになった。「えらい！先生に言われる前にすぐに拾えた！」と褒めると、「チャレンジ成功！」と言うなど、【整理整頓チャレンジ】を日々意識することができるようにもなった。

○　A児にトレーニングドリルを毎日行い、眼で見たものの形や色、距離感を正しく認識するための「視空間認知」トレーニングを行った結果、文字を枠に収めて書く事ができるようになり、文字のバランスも安定し、以前より整った字を書くことができるようになった。A児の保護者や、１年生の時からA児を見てきた教員からも「字がとても上手になったね」と褒められている。また、新出漢字で複雑な漢字がでても、お手本をゆっくりと見ながら、間違えずに書くことができるようになった。

○　見たいものを眼でとらえ、すばやくピントを合わせる「眼球運動」トレーニングを行った結果、音読をするときに、以前に比べて行を間違える回数が少なくなり、スラスラ読むことができるようになった。また、間違えずに読めるようになったことで自信がついたのか、大きな声で音読をできるようになった。今ではA児の方から、絵本

等を持ってきて「先生聞いて！」と、自発的に音読を聞かせてくれるようになった。

○　「SEL-8 学習プログラム」「ビジョントレーニング」の両方を実行することによってＡ児自身のできることが次々に増え、Ａ児が称賛されることが多くなった。一つ一つの行動に対して、しっかりと評価を行うことで、Ａ児の自己肯定感が向上し、それが学校生活の様々な行事や学習につながり、何に対しても意欲的に行動できるようになってきた。

（２）今後の課題

●　社会的能力については、結果が現れたから終わるのではなく、継続して行い、今回の挨拶だけでなく、総合的な社会的能力の育成にこれからも努めていきたい。「ビジョントレーニング」に関しては、学習上の見えにくさは、ビジョントレーニングを行うことで少しずつ克服できているが、生活上の見えにくさに関しては変化があまり見られない。今後は生活上の見えにくさも克服することができるように、今行っていることを継続して行い、トレーニングの有用性を定期的に検討し、Ａ児に適したトレーニングを考えていきたい。

◎　参考文献

・「小学校学習指導要領解説総則編」　平成２９年７月　東洋館出版社
・「社会性と情動の学習の進め方」　２０１１年１２月　小泉令三　著　ミネルヴァ書房
・「見る力」を育てるビジョン・アセスメント　２０１４年９月　奥村智人　著　学研